

天皇制イデオロギーと親英米派の系譜 ——安岡正篤を中心に——

小田部 雄次

はじめに

- 一 牧野伸顕の庇護
- 二 侵略と反革命
- 三 敗戦と追放
おわりに

はじめに

戦前と戦後の歴史をトータルに把握しなおそうという視点が、近年、重視されてきている。もちろん従来から、戦前と戦後の連続性と断絶性の問題をめぐって、戦前と戦後を関連づけようという試みはなされてきた。とりわけ占領史研究の蓄積は高まり、制度的には断絶性が強いことが明ら

かにされてきた。そして現在、戦前と戦後の間の断絶性をみとめつつ、連続性の存在をどうとらえていくかが、大きな課題として残されているといえる。⁽¹⁾このような研究方向に拍車をかけた近年の業績として、ジョン・ダワー『吉田茂とその時代』(出)(天窪愿二訳、TBSブリタニカ、一九八一年)があげられる。ダワーは「保守主義の遺産」ともいうべき吉田が、戦後にどのようにつながっていくのか、その具体的過程を分析している。確かにダワーの場合、人的な連続性を重視するため、敗戦後の諸改革もたらした断絶性というものをどう位置づけ、それが戦後の吉田の抬頭にどう関連するのかという問題を充分掘り下げているとはいえない。とりわけファシズム期における吉田の言動が、戦後とどう連続し、断絶しているのか、今一歩踏みこんだ議論

が必要となる。しかしそれらの課題を残しながらも、ダワーの研究は戦前と戦後をトータルにとらえようとする今後の研究方向に貴重な一石を投じたことはいまでもない。

ところで本稿は、戦前と戦後の保守主義の連続性に着目し、それが、制度的にも機能的にも、基本的には断絶している戦前と戦後の国家体制の中で、どのように連続し断絶しているのか明らかにすることを目的とする。その場合、戦後日本の保守政界の黒幕といわれる安岡正篤に焦点をあてたい。安岡は戦後、師友協会などを母体に、保守党代議士、官僚、地方有力者層を天皇制イデオロギーの下に結集させ、超党派的な改憲運動を展開している。すでに、松尾章一は、戦後の反動イデオロギーの「旗手」安岡に注目し、その活動を紹介している。松尾も「戦前と戦後の連続面にいっそう注意をはらわなくてはならない」とし、安岡の戦前と戦後の連続性を説明しようとしている。ただ、松尾は連続性を重視するあまり、「北一輝・大川周明らとともに代表的指導者として位置づけられている」と、ファシストとしての同質性を強調しているが、北・大川と安岡は必ずしも同質的にあつかえない政治的役割とイデオロギーをもっていた。そしてその違いが、安岡の戦後の抬頭をもたらす大きな要因ともなっていた。その決定的違いは安岡が、「親英米派」の宮中グループ、官僚等と太いパイプをもっている

たことであった。そのことが、戦時中も政界の中核にあり、戦後も追放解除後、再び抬頭しえた大きな理由であった。以下、一九二〇年代後半から、戦後追放されるまでの安岡の言動を分析しよう。なお追放後の言動については割愛した。別稿を期したい。とりあえず戦後の安岡については、本稿の「おわりに」でまとめたが、前述の松尾研究も参照されたい。今後戦後の各時期の変化を考慮した安岡論が必要であろう。

さて本論にうつる前に安岡の略歴にふれておく。一八九八年二月一三日生まれ。大阪四条畷中学、一高卒。一九二二年東大政治学科卒。在学中、上杉慎吉らに師事し、北一輝や大川周明との交流を始める。猶存社、行地社に加入する一方、皇居内の社会教育研究所に在籍す。また小石川金雞園内に東洋思想研究所設立。二七年同地に金雞学院創立。三二年埼玉県に日本農士学校設置。三二年国維会結成。「新官僚」グループのイデオログとして脚光を浴びる。四二年大東亜省顧問。この間、各省庁や地方で教化活動を続ける。四五年、敗戦の「玉音放送」原案執筆に加わる。四七年公職追放、埼玉農士学校に籠る。金雞学院は解散。五一年解除後、師友会活動を開始(師友会は四九年一〇月結成)。五八年新日本協議会設立、憲法改正運動を精力的に展開する。一九八三年現在八五歳。

一、牧野伸頭の庇護

戦前と戦後の安岡正篤の政治的地位の連続性は牧野伸頭の庇護によるところが大きい。牧野は一九二一年から二五年まで宮内大臣、二五年から三五年まで内大臣の地位にあった。宮中グループ「親英米派」の雄であり、「稳健派」・「現状維持派」と目された。このためファシズム形成期において「君側の奸」として排撃された。しかし政界の表面から隠退しても、牧野は、ファシズム国家の「権威主義的反動派」の一角を構成していた。¹⁾ もちろん「親英米派」としての性格は、ファシズム勢力の主流となりえなかつたが、そのことがかえって戦後への連続性をもたらす要因となっていた。それは牧野の女婿である吉田茂(後の首相)の戦中と戦後の動向に象徴されている。牧野グループの一員であった吉田はファシズム勢力内では非主流派であったが、それが彼の戦後の抬頭の大きな要因となっていた。²⁾

さて牧野の安岡への庇護は一九二〇年代に遡る。当時、宮内大臣であった牧野は皇居内に社会教育研究所を設置し、右翼的な思想研究を行なわせていた。安岡はそのメンバーの一人であった。もちろん当初から牧野が安岡を庇護していたわけではない。安岡の思想は当時まだ未成熟であった。

牧野の信任はむしろ安岡が北や大川と立場を異にした思想を確立していったことによって得られたといつてよい。

牧野が安岡を庇護した理由は、第一に安岡の国体観、第二にその国体観に基づく政治的行動の「微温性」にあった。安岡の国体観を簡潔に表現すれば、国体と政体の分離によってあらゆる政治的闘争から国体を擁護することにある。そのため議会主義も軍部独裁政治も政体の一形態としてとらえ、これらの政体が国体を擁護する機能を果す限り容認すべきものとしたのであった。³⁾ このような国体観はむしろ伝統的なものであり、殊更新しい視点があるわけではなかつた。しかしこの伝統的な国体観は、政治諸勢力の対立が激化した時代には、むしろ再確認される必要があつた。あらゆる国体思想が、共産主義運動に対する防遏としてのみ機能する場合はともかく、北一輝のように天皇を「革命のシンボル」としてとらえ、国体を政体の一形態とみなしたり、天皇を政争にまきこんだりすることは敬遠された。なぜなら、その場合、国体が政治的対立によって破壊される危険があつたからである。政治的対立が激化するほど、国体は政争の外におかれる必要があつた。そして政体は国体を擁護するための「安全弁」として、あらゆる政争に対応するための可変的なものとしてとらえられていた。安岡が北や大川から離れた理由のひとつに、天皇を「革命のシン

「ボル」とした彼らとの国体観の違いがあったことを考慮しておきたい。⁴⁾

一方、安岡の政治的行動の「微温性」は、彼のイデオロギーの「微温性」とともにしばしば指摘される。政治的行動の「微温性」とは、北や大川のような急進ファシズム路線をとらず、急激な「下から」の「革新」運動を忌避したことを意味する。安岡の政治的行動の特質は、第一に教化活動の重視がある。安岡は東洋政治学の素養を基礎に、前述したような国体観をイデオロギーとして理論化した。そしてこの国体イデオロギーの普及のための教化活動を行なった。金雞学院、農士学校、日本文化連盟などは、教化活動のための基盤として設置されたものである。第二に官吏の人格陶冶と諸機構への人材推挙がある。安岡は制度より官吏を重視した。どのような制度であれ、それを運営する官吏が人物的に不適格であれば意味がなく、まして共産主義イデオロギーに染まっただけでは国体が内部から転覆されると考えた。制度はどうあれ、それを運営する官吏が国体イデオロギーを信奉していれば、国体は擁護されると考えたのであった。藤田省三は日本ファシズムの政治原理を「メカニズムによる支配を要求することが同時に強力人格による支配の要求になる」と指摘した。これはファシズム期の官僚の意識や思想が、合理的な総力戦体制構築をめざ

先生の運命は大いに変わって、非常な貢献を日本に残されたに違いない⁹⁾と評した。牧野との人脈をめぐる両者の相違を意識した言葉といえよう。ともかくも安岡の「微温性」は、牧野を「君側の奸」として攻撃しない意志表示であり、一方で牧野の信任を得るための政略的意味もふくまれているのである。

さて、安岡は牧野の庇護をうけながら種々の政治的活動を行なう。それは急進ファシズム運動のような「下から」の路線ではなく、内務官僚を中心とした「上から」の路線であった。たとえば一九三一年五月、協同会は労働組合法案成立に尽力してきた添田敬一郎に代えて、社会局長官吉田茂(後の首相とは別人)を協同会常務理事にすえた。以後、金雞学院系の人物が協同会の主導権を握るようになった。一方、松本学は吉田の後任の社会局長官となった。松本は産業平和運動などにのりだが、吉田と松本は相互に連動しながら日本主義労働運動の育成に努めたのであった。ところで、この吉田と松本の人事は、牧野が安岡に相談し、安岡の進言によって決定されたものであった。人格陶冶と人材推挙による安岡の政治路線は、牧野の政治力と内務官僚の支持によって実現化したのであった。さらに著名なこととして、斎藤内閣成立時における「新官僚」の抬頭があげられる。五・一五事件のあとをうけて、三二年五月

しつつも、イデオロギーとしては非合理的な天皇崇拜であった矛盾を鋭くついている。この矛盾は安岡らの人格陶冶の活動によって、各個人の意識の中で整合化されていた面があったといえる。ともかくも、このような安岡の政治的行動の「微温性」は、宮中グループと独占資本の政治的・経済的利益を代弁した日本ファシズムのイデオロギーに適合したものであった。

ところで、この安岡の「微温性」は結果としては彼自身の保身の役割も果たした。周知のように安岡は一九二〇年代において北や大川ら急進ファシストと路線を同じくしていた。大川はむしろ安岡より牧野の信任厚く、皇居内の大学寮の中心人物としてふるまっていた。しかし北や大川は急進化するにつれ分化し、大川は牧野から離れた。三〇年代のファシズム形成期においては、北や大川は牧野を「君側の奸」と排撃するまでになる。一方、安岡は二〇年代から三〇年代にかけて、牧野の信任を厚くしていく。とりわけ急進ファシストの温床と化した大学寮の解散を手がけた安岡は、そのことによって北や大川ら急進ファシストとの違いを明確にし、「御用学者」としての立場を表明したのであった。そのことは逆に、牧野が安岡の政治生命を保証する意味をもっていた。安岡は大川の没後、大川を「先生がもし偉大な政治家を先輩に持って、これと結ばれたら、

に成立した斎藤内閣には農相として後藤文夫が入閣するなど、安岡の主宰する国維会メンバーが数多く政府要職に配置された。この時の人事にも牧野と安岡が一枚加わっていたことはいうまでもない。¹⁰⁾

そもそも安岡と内務官僚の関係は、牧野の名代として金雞学院に参与していた宮内次官関屋貞三郎が内務官僚であったことにも一因があった。関屋は牧野と安岡と「新官僚」と称された内務官僚群をつなぐ重要な「パイプ」であった。¹¹⁾急進ファシズム運動の全盛期に、それに対抗する形で「上から」のファシショ化が同時進行しており、その背後に「君側の奸」と排撃された牧野らがいたことは留意する必要がある。

二、侵略と反革命

一九三六年の二・二六事件によって「下から」のファシショ化路線は政権獲得の可能性を失うが、「上から」のファシショ化は進行し続ける。総力戦体制構築を目指す陸軍は、二・二六事件を逆利用しながら政治的進出を図り、中国大陸への武力侵略の拡大の機をうかがった。安岡も陸軍の政治的進出や武力侵略について基本的には反対しなかった。しかし安岡は、国内体制の急激な変革や大陸経営の

悪化が国体の崩壊をもたらすことを極度に恐れた。とりわけ満州経営の悪化は「民心の離叛、学良、赤露の魔手と相待つて前途恐るべきもの御座候」と認識して¹⁾いた。そのため二・二六事件勃発前から国内政治と大陸経営に関する政治的進言を牧野や閔屋に行なっていた。たとえば三五年国体明徴運動のさなか、安岡は北陸・東北・近畿・北九州・山陰・東海諸地方を巡遊した。その結果「邦家即今一大転機に在り」と認識し「為政者非常の膽識機略を要する時にて若し坐して運を待つのみならば又恐るべき紛乱を免れず」と積極的対応の必要性を主張した²⁾。この主張は三六年三月『時務逢原』にまとめられ各方面に配布された。その具体的内容として、内閣顧問会の設置、九道制の設置、議員候補者の自薦運動の禁止、教育制度の改革、などがあげられ、その理念は内務省によって漸次的に実現化されていた。なかでも議員候補者の自薦運動の禁止は四二年の翼賛選挙につながる発想として注目される。安岡によれば「抑東洋政治観念に依れば今日の選挙は寧ろ『貢挙』と謂ふべく、選挙てふ成語は政府が民間より広く人材を選用する義なり。いづれにするも、従来の如き自薦運動は国風に不合」とされた³⁾。

一方、三七年七月の蘆溝橋事件以降、大陸経営は一層悪化した。とりわけ官吏の風紀の乱れを憂慮した安岡は、官二項目について牧野らに政治的進言をした。「外征」については「支那問題が国勢の決定的大事であることは申すまでもありません。今後の対策に就てもし消極策を採れば、結局曾てのシベリア出兵を大々的にしたものに過ぎぬようなことになって、且つその当時と異り、国の内外に恐るべき反作用を続発すること疑ありません」と撤兵に伴う革命の危険性を訴え、中国との「善隣」外交路線を主張した。とくに「果して我が国は、どれほど大陸経綸に確信と実力とがあるか」と経済開発主義による侵略を批判した。また「内政」では「吏事があって政治がない」として、軍部の政治的進出を批判し、「強力内閣」の設置、財政破綻と人民疲弊の防止、官民一致、人材の自由任用などを主張した。安岡は「国体に千載の恨事」を惹起させずに日中戦争を打開させようとしたのである。経済主義的侵略や軍部の内政干渉に対する批判的な言辞がみられるが、それは「民族的自壊現象の惹起」や民衆の「官に対する反感憎悪を益々煽る」ことを恐れたためであった⁴⁾。

当然、安岡は「大東亜共栄圏」の確立に基本的に反対するものではなかった。しかし「一君万民」制による国体の永続と、それを支持する親日政権との「国交」が、彼の目的であった。そのため大陸侵略や内政改革について軍部と路線を異にする面があった。そして戦局の悪化につれて、

天皇制イデオロギーと親英米派の系譜(小田部)

吏の心得を説いた張養浩の『三事忠告』に訳註を付し『為政三部書』と題して出版した。同書は「廟堂(内務大臣)忠告」「風憲(法務警察)忠告」「牧民(地方行政)忠告」の三部から成り、「制度機構よりも、政治や役人にどういふ哲学・信念・道徳を持たせるか」という目的をもって⁵⁾いた。そして同書はたんに官吏の風紀紊乱を正すのみならず「共產革命政権でも出来れば、日本は本質的に一変してしまふであらう」という反革命的な意図がふくまれていた。つまり、日本人の風紀紊乱が大陸での反日感情を増大させることを防ぐと同時に、日本人官吏の共產主義化をも防止しようという二重の意味がふくまれていたのであった。むしろ安岡のいう風紀紊乱の是正とは、共產主義化の防止にほかならなかった。「為政三部書」は「戦前は参謀本部から、戦後は検察幹部の参考書としてリプリントされ珍重されてきた」といわれるが、まさに天皇制官吏のイデオロギイ的教典といふべきものであらう⁶⁾。

さて日中戦争が泥沼化するにつれて、安岡は「国体に千載の恨事」が惹起する危険性をより強く感じはじめた。安岡は「国事愈々多難を加へ、万里懸軍の始末、幾万人の死傷、幾十万の結核花柳病等、大軍駐防、民衆の怨嗟、風教の頹廢、財政経済の窮迫、国政の動盪……此等の外に又至難な大陸の経営」という現状認識に立ち、「外征」と「内政」の

安岡の路線の独自性は一層明確になっていった。四四年九月、安岡は閔屋に「支那事变徹底處理案」を提示した。安岡は政府の対重慶、対延安、対ソヴィエト工作を批判し、「始を原ねよ」として「大東亜戦争」の理念の完遂を主張した。具体的には「大東亜戦争を解決する為には先づ支那事变を解決せねばならぬ」として「支那救国の一大民族運動を全面的に展開」し、「四億の蒼生がこれ以上塗炭の苦に陥ることは最早天人共に忍びぬ人道問題である。日本もアメリカも宜しく断然支那より兵を引き、重慶中共も干戈を収めて、支那を禍乱の巷より救ふべし」という要求を「閔屋各方面に提議させること」であった。しかも「この案は単に支那事变の清算に止まらず、之に依って両国憂国の土の意思を疏通し、国民的結合の復活となり、おのづから東洋精神の復興、東亜新秩序の建設、大亜細亜政策の発端を期することとが出来る」と虫のいい効果も期待していた。国体の永続とそれを支持する親日政権との「国交」を⁷⁾目論む安岡の意図が明確に表現されているといえる。同案は政策として具体化されることはなかったが、安岡のこのような方針は中国の親日派の共感を得、戦後の中華民国政府関係者との人脉を構成する基礎となったと考えられる。安岡の路線の完成は、むしろ戦後に委ねられていく。

ところで付言すれば、牧野グループに属する安岡がファ

シズム国家の政治的支配層内で非主流的な位置を占めていたことはいまでもないが、しかしそれは戦争遂行をめぐる政策決定においてであり、国民統合の面ではむしろ主流的であったといえる。そして牧野や内務官僚との人脈の強さが、戦時下における彼の「反軍的言辭」を可能ならしめていたと思われる。それは日本フナシズムの政治的支配層の人脈構造が、天皇に最も近い宮中グループを頂点として、そこに連なる形で各派閥が構成されていたためである。だからこそ安岡のような「反軍的言辭」が可能であったのであり、そこから戦後に連なる勢力も形成されてきたのである。もちろん、牧野グループの構成員でもある吉田茂の監禁が、彼らに大きなショックを与えたことはいままでもないが。

三、敗戦と追放

一九四五年八月一日、多くの一般国民は天皇の「玉音放送」によって敗戦を知らされた。しかし安岡は戦時中から大東亜省顧問となるなど中央政界の情報に詳しく、八月一日にポツダム宣言受諾決定を知っていた。彼は同夜、金雞会館主事の吉田啓三を呼び、日本農士学校の職員学生に敗戦決定にいたる経緯と敗戦後の心得を説いた書状を渡

しかし連合国の民主化改革は戦前天皇制の制度的基盤を次々とうちこわしていった。もちろん民主化改革は不徹底な面もあったが、それでも戦前の天皇制勢力は大幅な後退を余儀なくされた。安岡正篤もまたその勢力を弱めざるを得なかった。彼は戦犯指名こそ免れたものの公職追放となり、彼が主宰した金雞学院は解散させられた。安岡は金雞学院存続のため吉田茂(後の首相)らに積極的に働きかけたが、金雞学院解散と安岡をはじめとする金雞学院系を中心勢力の追放は避けられなかった。しかしこの働きかけによって日本農士学校の存続が認められ、安岡はかろうじてその勢力を温存することができた。³⁾

ところでC I S(民間諜報局)のトム・田中、牧野、杉原らが金雞学院の調査を行なったが、日本の天皇制について調査を続けていた総司令部は、彼らを通じて安岡に「日本の天皇制」に関する質問をした。安岡は「凡そこの国家でも、国旗か、元首か、憲法か、国民の依りどころがあるものです。我が日本は、皇統連綿として二千六百年、民族の心が、天皇を戴いているのです。若し連合軍が日本国民の心を無視して、占領政策を行ったら大変な間違いです」と占領政策における天皇制温存の有効性を主張した。⁴⁾

この時期の安岡が天皇免責や天皇制護持のためにどの程度の積極的な政治活動がなし得たか疑問である。しかし閑屋

すよう命じた。そこには「敵モシ皇國ヲ冒瀆スルノ回答ヲ発センカ、終ニ七千万ノ同胞ヲ芋ツテ皇國ニ殉ズルノ外ナカルベシ」と国体護持が不可能な場合は玉碎する方針が示されていた。また国体が護持されても「戦争ニモ増ス苦痛ト紛乱ト屈辱」が来るだろうから、「諸子夫レ深潜敵毅ヲテ自己人物ヲ鍊磨シ、鎮護国家ノ道約ヲ果スニ遺憾ナカラシムコトヲ期セヨ」と敗戦後の隠忍自重を説いた。¹⁾

結局、連合国の回答は国体について不問のままであったが、安岡はこれを逆手にとって国体護持のための思想宣伝を国民や連合国に行なっていた。周知のように安岡は「玉音放送」の原案執筆者のひとりであったが、この時の安岡の意図は国体イデオロギーの連続性を強く主張することにあつた。その眼目は「義命の存する所」と「万世の為に太平を開かむ」の二句におかれた。「義命」とは「春秋左氏伝」の「信以て義を行ひ、義を以て命を為す」から引用され、大義名分よりはるかに重い道德の至上命令を指すという。また「万世ノ為ニ太平」という語句は宋の学者張横渠の格言からとり、永遠の平和をのぞむという意味を天子の言葉として重厚な表現にしたものという。結局「義命の存する所」は「時運の趨く所」に修正されたが、「陛下のお考えに沿って平和を招来できた」とする安岡の意図は、「玉音放送」の文面の中に貫徹された。

貞三郎が、その総司令部に与えた影響力の程度はともかく、軍事秘書フェラーズや外国人宣教師を通して天皇無罪工作を行なっていたことを考慮すれば、安岡も一定の役割を果していたと考えられる。

ひとつの例として笹川良一の奇妙な行動がある。笹川は敗戦後の八月二七日と三〇日に金雞学院におもむき、安岡と懇談している。⁶⁾その内容は不明であるが、その後、笹川は当時の右翼にみられた「看板代え」もせず、むしろ以前にもまして国粹主義的な言動をとり、GHQに対する悪印象を強めるのである。日本の特高やアメリカ國務省の政治顧問団が、笹川や笹川系の全国勤労者同盟の動向を注視していたが、それは笹川の勢力の重要さというより、その行動の奇抜さにあつたからであらう。ともかく笹川自身にいわせれば「戦犯志願」であつたこの示威運動は功を奏し、彼は、その戦時中の行動の罪の「軽さ」にもかかわらずA級戦犯となる。笹川は巢鴨刑務所内で岸信介ら政界の「大物」と懇意になるが、当然、アメリカ側との「パイプ」も形成されたことは想像しうる。この笹川の「戦犯志願」はどこまでが計画的なものであつたかは定かでないが、笹川釈放の翌日、安岡がまさきに祝ひにかけつけたという話を考慮すれば、安岡と笹川の間に何らかの黙約があつたと疑いたくなる。少なくともアメリカ側の政策転換

によって、笹川の行動は結果的には「大成功」を収めたことになった。そしてそれは戦前の国体イデオロギーに一貫性をもたせて戦後につなげようとした安岡の意図のひとつの実現でもあった。

もちろんすでに、占領初期の民主的改革と戦後の国民の政治意識の覚醒は、追放解除後の安岡の思想を国家の正統イデオロギーにすることを拒んでいた。それでも戦後になって、「親英米派」であったゆえにむしろ支配層内では主流的存在となっていた安岡は、その派閥的影響力を背景にして、支配層内に多くの同調者を獲得していこうとした。そのための母体となったのが全国師友協会であった。そしてその運動は戦後三十数年を過ぎた現在でも続いている。

おわりに

一九八〇年一月七日、八日の両日、全国師友協会は日本工業クラブで第三一周年創立記念全国大会を開いた。第一日目は各地幹部懇談会が行なわれ、各地師友会の実践活動報告がなされた。第二日目は中央大会が催され、中央の政財官界人の挨拶などがなされた。とくに中央大会の様子を述べれば、まず「国歌・君が代」「会歌・日本の誓ひ」「讃歌・万世太平の曲」が陸上自衛隊中央音楽隊の演奏に

固持のみで支えることは無理がある。安岡のイデオロギーが支持される社会的・経済的基盤と構造にメスをいれることが必要となる。

そして今日、安岡自身が表面にでなくとも、安岡のイデオロギーがもっとポピュラーな手によって流布されはじめていることにも注視すべきであろう。たとえば、小生向けの漢字教育で話題を集めている石井式漢字教育がある。これは発案者石井勲が全国師友協会の支援をうけながら、各地域や学校に流布したものであった。石井式漢字教育は「六年間に習ふ漢字を一・二年の時に全部出して、六年間見続け、読み続けること」⁽²⁾を骨子としている。しかし、その政治的意図は孝経や論語の素読により「各幼稚園や各小学校を(儒教思想で)引用者)啓蒙」⁽³⁾することにあった。さらに伊藤肇(元『財界』副主幹、八〇年死去)はサラリーマンを対象に「帝王学」などを平易に解説し出版していたが、その内容は安岡のうけ売りで、サラリーマンの生活指標としての儒教の再評価を求めたものであった。八〇年六月、PHP研究所から出版された『帝王学ノート』は、『師と友』に「醒睡帖」と題して連載されていたものをまとめたものであり、八一年一月で一三刷を数えている。⁽⁴⁾一方、NHKは八一年テレビシンポジウム「日本の条件―世界そして日本は」を放送し、関連番組として

より斉唱された。「万世太平の曲」は陸上自衛隊中央音楽隊の創立一〇周年に際し、須摩洋朔中央音楽隊長が作曲し、安岡正篤が作詞したものであった。斉唱後、安岡の挨拶、中華民国立法院委員王新衡の来賓祝辞(林大幹代議士が世話役)、日本経営者団体連盟会長大槻文平・衆議院議員山下元利の同人挨拶が述べられた。全体の司会役は師友協会理事横溝光暉が行なった。まさに人脈的には戦前・戦後の天皇制ナショナリストの祭典ともいべきものであった。なかでも山下は八〇年ダブル選挙の自民党圧勝の余勢をかって「私は元防衛庁長官の経験を生かし、速かに国防を固め、国際的に信用を得ることが大切だと考え、関係法案の成立に努めている」と自衛隊強化を主張した。⁽¹⁾戦後三十数年で師友協会は支配層内に着実にその支持を獲得してきたといえる。そしてそのことは、安岡の主張やイデオロギーが、政策に反映される理由ともなっている。しかし未だに、占領初期の諸改革によってもたらされた民主的諸制度や、敗戦後の国民の民主政治に対する覚醒を除去するには至っていない。現在の安岡や全国師友協会の活動はこの二つの「障害」の除去にあることはいうまでもない。しかし逆にいえば、彼らにとっての「障害」を守り、発展させることが、現在の「右傾化」を阻止するひとつの方法であるといえる。もちろん「右傾化」阻止を民主主義イデオロギーの

「国際政治を語る」を企画した。これらの番組は『日本の条件』と題し出版され、八二年現在、同シリーズはテレビ、出版とも継続されている。NHK解説委員長山室英男は第一回放送の総合同会をつとめ、それを出版物にした『日本の条件 1序論』で序文を記した。その中で山室は「私の考え方は次のように要約することができます」として、「インターナショナル(国際)とは、ナショナル(国家的・民族的)なものとの対峙、確執、闘争をいう。だからナショナルなもの(を)主張できない国家、民族は、国際社会の一員ではない。万一、日本人が、戦後三六年余、日本ナショナルなものを削ぎ落とすことに努力してきた結果、われわれ自身、日本ナショナルなものをいま確認できない状況にあるとすれば、あるいはわれわれの歴史、文化、伝統を自覚できないとするならば、われわれはすでに国際情勢を理解できない民族になっているのではないか」と記した。⁽⁵⁾いわばインターナショナルに名をかり日本ナショナルリズムの高揚を狙ったのであった。ところで山室は七八年の全国師友協会第二九回大会で講演を行ない、「ここ七年ほど安岡先生の教えを受け、時に、テレビのニュース解説をした際にも、先生のご意見などを伺ったりしたことがあります」と述べた。⁽⁶⁾安岡のイデオロギーがストレートに山室に反映しているわけではないにせよ、山室のいう日本ナショナルリズム

ムの性格は、安岡の天皇元首化論からそう離れてはいまい。少なくとも安岡や全国師友協会のイデオロギーが、人脈的つながりによって公共の電波で流布されているというところは注視しておくべきだろう。さらに付言すれば、これら一連の現象は、全国師友協会の活動全体からすれば「氷山の一角」であり、戦前の日本文化連盟に匹敵する組織が存在することは容易に想像しうる。国民意識の「右傾化」に果している全国師友協会の役割には大きなものがある。

註

はじめに

- (1) 占領期に関する研究論文は枚挙にいとまがない。連続性と断絶性についても単純に断定することはためられる。ここでは戦前と戦後の断絶性をみとめつつ、戦後にもちこまれた「戦前要素」をどう位置づけるかという立場をとりたい。
- (2) 松尾章「現代日本の右翼思想とファシズム—安岡正篤を中心に—」(増島宏編『現代日本の思想構造』法律文化社、一九八二年)一六頁。
- (3) 戦前の安岡については拙稿「資料紹介『安岡正篤書翰』」(立教大学史学会『史苑』四〇巻二号、一九八〇年一月)も参照されたい。

一、

- (1) 山口定『ファシズム』有斐閣、一九七九年、参照。山口

皇制国家の支配原理』未来社、一九六六年、一六一頁。

- (8) 関屋貞三郎宛安岡正篤書翰(国立国会図書館憲政資料室所蔵「関屋貞三郎文書」)によれば「例の大学寮も小生漸く諸般の俗務を了し逝歳と共に円満に解散、小尾晴敏氏の手に渡し申候。立つ鳥跡を濁さずの戒も有之、忍び難きの事も忍んで先は一切を小生の不徳に負ひ平和に解紛せし努力を以て御期待を破りし罪は御海容下され度候。今更論ずる迄もなく大学寮となりても小生が学盟を承りしは少壮血氣の学子等が徒に世を呪ひ人を罵り所謂處士横議の体に流れずして深く道を学びつつおのづから大義を明らかにする様一臂の力を尽すに有之候ひき、然るにお耳に入居候如く果して着実なる学道を閑却し高談放論或は酒色に快をやう教育の分を忘れて兎角政治的社会的輕拳妄動に走る等の事に墮せしは実に小生の不徳に帰する外なく慚愧に堪へず候も今更又共に学ぶべし未だ共に道を適くべからずの感深く候。これよりは一層退蔵還養の願望に有之。何卒向後とも存分御教誨願上候」とある。日付は不明であるが、一九二六年頃と思われる。
- (9) 安岡正篤「大川斯禹先生」(『新勢力』三卷一二号、一九五八年)六三頁。
- (10) 拙稿「日本ファシズムの形成と『新官僚』—松本孝と日本文化聯盟」(日本現代史研究会編『日本ファシズム(1)国家と社会』大月書店、一九八一年)参照。
- (11) 前出「関屋貞三郎文書」には内務官僚からの書翰も多く、牧野グループの研究に不可欠の資料となる。

天皇制イデオロギーと親英米派の系譜(小田部)

によればファシズム国家の政治的支配層は「権威主義的反動派」と「疑似革命派」の「政治的同盟」によって構成されるという。牧野伸顕は宮中グループ「穩健派」であるが山口のいう「権威主義的反動派」の一角を構成しており、宮中以外の諸勢力もふくめた牧野グループは戦後につながる重要な勢力を形成していたとみなせる。

- (2) 牧野と吉田については、たとえば功刀俊洋「牧野伸顕宛吉田茂書翰」(前出『史苑』四一巻一号、一九八一年四月)参照。また近年の吉田論としては、前出「吉田茂とその時代」、猪木正道『評伝吉田茂』(読売新聞社、一九七八年八月一年)参照。
- (3) 安岡正篤「再び日本主義に就いて」(『国維』六号、一頁)。
- (4) 久野収は丸山真男を批判しながら、北一輝こそ日本ファシズムの思想的源流と指摘した(久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』岩波書店、一九五六年)。また橋川文三も超国家主義と国家主義一般の区別の必要性を強調した(橋川文三「昭和超国家主義の諸相」『近代日本政治思想の諸相』未来社、一九六八年)。しかし、北の超国家主義は急進ファシズム運動のイデオロギーとはなりえても、国家の正統イデオロギーとして広汎な支持があったとは思われない。
- (5) たとえば土方和雄「日本型ファシズムの擡頭と抵抗」『近代日本社会思想史Ⅱ』有斐閣、一九七一年。
- (6) このイデオロギーを集約したのが、後述する『為政三部書』である。
- (7) 藤田省三「天皇制のファシズム化とその論理構造」『天

二、

- (1) 前出「安岡正篤書翰」七二頁。一九三四年五月五日。
- (2) 前出、関屋宛安岡書翰、一九三五年二月二六日。
- (3) 安岡正篤『時務逢原』(『金雞文叢』三〇号)。
- (4) 安岡正篤『為政三部書(新版)』明德出版社、一九五七年。
- (5) 前出「安岡正篤書翰」七三〜七四頁。日付不明。一九三九年頃か。この進言書はタイプ印刷であり、関係方面に配布されたと思われる。
- (6) 前出、関屋宛安岡書翰、一九四四年九月一八日。タイプ印刷であり、牧野にも送られたであろう。

三、

- (1) 林繁之「終戦余録」(『師と友』三一五号、一九七六年四月)。
- (2) 「安岡正篤氏が語る終戦詔書秘話」(『サンデー毎日』一九八一年二月二七日号)。
- (3) 林繁之「菅谷の狂苦難」(『師と友』三三二号、一九七七年九月)。また前出、関屋宛安岡書翰の中に、金雞学院存続のための証言を関屋に依頼したものがふくまれている。それには「第一、財団法人金雞学院二元ノ通り存続ヲ許可スルコト。第二、ヤマナクバ、財団法人金雞学院ノ一部デステニ存続ヲ許可サレテキル日本農士学校ガ学院ノ資産ヲ一切継承スルコトヲ許可スルコト。コノ場合財団法人金雞学院関係ニヨル追放該当者ヲ解除サルムコトヲ願ヒ致シマス」とある。日付は不明であるが、興味深い資料である。

- (4) 林繁之「終戦余録(+)」(『師と友』三二四号、一九七七年一月)。
- (5) 高橋紘・鈴木邦彦「天皇家の密使たち―秘録・占領と皇室」徳間書店、一九八一年。
- (6) 畑中治「金雞園日誌」(『師と友』一六七号、一九六三年九月)。
- (7) 特高の情報については『資料日本現代史3、敗戦直後の政治と社会②』(大月書店、一九八一年)参照。また政治顧問団の情報についてはエマソンが作成した「Weekly report」(週間報告)の政党関係のもの(国立国会図書館現代政治資料室所蔵)が有益である。
- (8) 笹川の「戦犯志願」や菓嶋での状況については山岡荘八『破天荒・人間笹川良一』(有朋社、一九七八年)参照。
- (9) 大森修平『なぜ君は笹川良一が嫌いなのか』弘済出版社、一九八一年、一四四頁参照。
- おわりに
- (1) 『師と友』三七一号、一九八一年一月。
- (2) 吉田良次「石井式漢字教育実践小学校視察記」(『師と友』三七五号、一九八一年五月)。
- (3) 吉田良次「第二回郷学振興大会を終へて」(同前、三七八号、一九八一年八月)。
- (4) ちなみに安岡は松下政経塾相談役であり、全国師友協会とPHP研究所の関係も深いものがある。
- (5) NHK編『日本の条件 1序論』日本放送出版協会、一九八一年、一四頁。
- (6) 山室英男「日本とヨーロッパ 第二十九回中央大会諸家清話(+)」(『師と友』三四七号、一九七九年一月)。
- (7) 安岡は「日本と天皇について」(『師と友』三二二号、一九七六年一月)で「日本の新憲法は早く天皇を国家の元首として明記せねばならない」と主張した。この主張は戦後の安岡の思想と行動の基本原理とみなせる。
- (8) 日本文化連盟は安岡が中心となり「新官僚」グループと国民意識の統合のために組織した秘密の文化団体である。その活動は一九三三〜三六年に集中的に行なわれ、後に日本文化中央連盟に発展解消した。その詳細は前出「日本フアンズムの形成と『新官僚』」参照。
- (9) ちなみに稿者は笹川良一の活動に日本文化連盟運動と同質のものを感している。マスメディアの利用や文化人の組織化など共通点が多い。安岡と笹川の関係も底流では深いつながりがあるようだ。たとえば笹川良一夫人の鎮江は詩吟家であり、師友協会の大会などでその「喉」を披露している。そして良一自身は財団法人日本国民音楽振興財団を組織し、音楽家の統制を進めている。
- (立教大学大学院生)